

## 2016 年度 事業報告

### はじめに

国内のがん患者は依然として増えており、国立がん研究センターの推計によると、新たにがんになる患者が 2016 年は初めて 100 万人を突破した。一方、同年 12 月にはがん対策基本法が改正され、がん教育、がん患者就労支援が盛り込まれるなど、画期的な 1 年でもあった。がん検診の分野では胃がん検診・乳がん検診の厚労省指針が改定され、がん教育の分野では文部科学省が 2017 年度からがん教育を全国展開する方針を示した。

こうした動きを受けて日本対がん協会は 2016 年度、新たにがん検診研究部門を設け、今後のがん検診のあり方を考える事業を始めるとともに、増え続けるがん患者支援のため、がんサバイバー・クラブ発足に向けた準備を始めた。10 周年を迎えたリレー・フォー・ライフのさらなる強化や、ピンクリボンフェスティバルでは乳がん患者支援を例年以上に前面に出すなどした。がん教育では新たな動画教材を作って文部科学省選定を得たほか、がん征圧全国大会、各種セミナー開催、広報 P R 活動、海外奨学医制度などの専門家支援も例年同様実施した。がん予防のため東京五輪を前にした禁煙活動強化にも取り組んだ。

### グループ支部との連携

こうした事業を進めるうえで重要なのはグループ支部との連携だ。16 年度の公 1～公 4 事業の多くは、支部の協力によって支えられた。

がん検診研究では、高齢者のがん検診を考えるための基礎調査を支部の協力を得て実施したのをはじめ、年間延べ 1100 万人のがん検診データをまとめた年次報告を支部との共同作業で行った。全国 49 力所に広がったリレー・フォー・ライフは支部の協力のもとで進められ、特に山口・香川では支部の強力な支援を得て、初開催することができた。9 月のがん征圧全国大会は開催地である京都府支部との共催で開かれ、全国の支部幹部が一堂に会した。

ピンクリボンフェスティバルや西武ドーム球場（名称は当時）での啓発イベントでは、支部に検診車を派遣してもらった。このほか子宮頸がん検診の未受診者対策、全国巡回がんセミナーなどの各種セミナー、乳房超音波講習会などの研修も、支部との共同で行われた。今後も支部との協力関係は重要視したい。

## 公1事業 がん知識・がん予防の普及啓発活動

### 【ピンクリボンフェスティバル】

乳がんの早期発見の大切さを伝え、患者さんや家族を支援するピンクリボンフェスティバルは、グループ支部の協力を得て東京、神戸、仙台で開かれ、計約9千人が参加した。

東京のスマイルウォークとシンポジウムには、乳がん手術から半年を経たばかりの女優・南果歩さんが出演した。ウォーク会場での専門医とのトークショーでは、南さんが闘病体験を涙ながらに語る場面もあり、多くの参加者が聞き入った。シンポジウムは定員の3倍の応募があり、16年度も満席となった。乳腺外科、腫瘍内科、精神腫瘍科の専門医らの話に熱心にメモを取る来場者が目立った。当日は新たな試みとして患者やサバイバーの交流の場「なかま Café」を設け、患者会の活動紹介や看護師による相談会、リンパ浮腫対策のエクササイズのデモンストレーションなどを行った。

神戸と仙台のスマイルウォークには、フィギュアスケーターの安藤美姫さんが出演した。検診の受け方や最新治療情報などを参加者と同じ目線から専門医に尋ね、「40歳を過ぎたら検診を受けましょう」と呼びかけた。東京と神戸のウォーク会場では、マンモグラフィー検査の無料体験を実施した。

啓発ポスターのデザインなどを公募する「デザイン大賞」には、今年も1万5千点を超える作品が寄せられ、グランプリ作品を使用したポスターを交通広告として各地で掲出したり、自治体などにデザインを無償提供したりした。

### 【リレー・フォー・ライフ (RFL)】

がん患者を支援すると共に、がん予防への関心を高めがん征圧を目標とするリレー・フォー・ライフは2016年度、10周年を迎えた。開催地は前年度より2カ所多い過去最多の49カ所で、参加者は計8万1,186人、そのうち主役のサバイバーは4,663人が参加し、チーム数は1,587に上った。

新規開催地は苫小牧（北海道）・甲府・大津・美祢（山口）・高松で、山梨・山口・香川の3県では、県内で初めてRFLが開催されることとなった。15年度に開かれた三浦半島（神奈川）、一宮（愛知）、近江八幡（滋賀）の3カ所は開催を取りやめた。

10周年の節目なので、記念ロゴマークを製作したり、記念のポロシャツ・リストバンド・バンダナ・グッズセットを作ったりした。また、全国のがん患者や家族らが10年間の想いなど記した記念誌「希望の道標～結い～」を2千部出版した。協賛企業からは10周年記念の布製タスキを頂いた。このタスキに各地実行委員が一言メッセージを書き込み、開催の早い地区から次の地区へとタスキ

をつないで連帯感を共有した。大津では、滋賀医科大学生をはじめとする地元の学生だけで実行委員会が結成され、日本初の「カレッジリレー」として注目を浴びた。熊本では当初、5月開催を予定していたが、熊本地震でいったん中止になった。しかし地元の実行委員会の熱い想いで10月に開催し、全国から駆けつけた多くの仲間が地元の患者・家族らを励ました。

東京から離れた地域でのRFLを強化するため、協会は15年度からスタッフパートナー制度を設け、協会代理人として活動してもらっている。16年度は新たに中国・四国地区の1人と契約を結び、既存の2人とあわせて、スタッフパートナーは計3人となった。RFLの未開催県は秋田、富山、石川、三重、鳥取、島根、岡山、長崎で、過去開催されたが現在未開催の鹿児島を含めると8県となった。17年度以降の開催を目指す。

### 【がん教育】

がん教育はこれまで、一部の小中高校でモデル授業として行われてきたが、文部科学省は17年度から全国展開する方針だ。17年3月告示の新学習指導要領には、21年度から中学の保健体育授業でがん教育を実施することが明記された。学校現場から「どのように教えたら良いか」という声が出ていることから、協会は16年度、特に教材開発に力を入れた。

まず、奥仲哲弥・山王病院副院長によるがん教育授業、禁煙教室を映像化したDVD「Dr.奥仲の熱血出前授業」を5月に1千枚作成した。次に、がん教育で取り上げるべき項目をクイズ形式で学ぶことができるアニメ動画「よくわかる！がんの授業」(中川恵一・東京大学医学部准教授監修)を11月に作り、協会ホームページ上で公開した。このアニメ動画教材は、中高校生向き教材として「文部科学省選定」の評価を受けた。さらに、学校教師向けの指導用DVD教材として、「Dr.中川の解説付きよくわかる！がんの授業」2千枚を作り、17年1月から教育現場への提供を始めた。また、小児がんへの理解を促進する小学生向けの絵本形式のがん教育読本を17年2月に完成させ、ホームページで公開した。

協会にはこれらの提供依頼が相次ぎ、過去に作成した動画DVD教材を含めて、16年度は教育委員会など228の行政機関、小中高大学120校、39の病院などへ、計2,077枚のDVD教材を提供した。

2010年度から続いているがん教育モデル授業は16年度、2都県5校で実施した。また、神戸市、東京都町田市、大阪府吹田市、兵庫県の4カ所で、教員向のがん教育研修会に参加・協力した。

このほか、サッカーの香川真司選手の名を冠した「香川真司カップ」に協力して16年12月、仙台市の会場で、がん教育のブースを出展した。

## 【その他の対がんキャンペーン】

### ① 乳がんをなくすための「ほほえみ基金」キャンペーン

埼玉西武ライオンズが西武ドーム球場（名称は当時）で5月に開いた乳がん・子宮頸がん検診啓発イベント、イオンバイク社が千葉市内で開いたピンクリボン支援のサイクルレースイベントにそれぞれ協力して、協会ブースを出展した。西武ドーム球場のイベントでは、埼玉県支部に検診車を出してもらった。ゴルフ専門テレビ会社「ジュピターゴルフネットワーク」が開催するゴルフコンペやピンクリボンキャンペーン、「高室池ゴルフ俱楽部」（兵庫）、「一の宮カントリー倶楽部」（千葉）、「大月カントリークラブ」（山梨）のピンクリボンチャリティーコンペにも協力して、参加者へ啓発グッズを配った。

受診率向上キャンペーンとして行っている協会独自の無料検診クーポン券は、乳がん無料クーポン券を6500枚、子宮頸がん無料クーポン券を700枚、女性向け大腸がんクーポン券を300枚発行した。乳がんクーポン券のうち2500枚は千趣会提携によるクーポン、1千枚は森永乳業提携によるクーポン券だった。

協会を支援する企業の勉強会に、講師を派遣する啓発活動にも力を入れた。乳房触診モデルの貸し出し事業も引き続き実施し、16年度は保健所、学校、クリニック、企業など計73カ所に貸し出した。

ほほえみ基金に寄せられた寄付金は16年度、9485万円。以上のキャンペーンのほかに、ピンクリボンフェスティバル、乳がん関係の広報PR活動（以上公1）、乳がん啓発団体助成、乳房超音波技術講習会（以上公2）、乳がん関係の無料がん相談、乳がん患者向けセミナー（以上公3）にも、ほほえみ基金の寄付金を充当した。

### ② がん征圧月間キャンペーン

9月はがん征圧月間で、各地でがん征圧活動が繰り広げられる。その中心事業である「がん征圧全国大会」と記念シンポジウムは9月8・9日、京都で開かれ、山田啓二京都府知事、門川大作京都市長、横倉義武日本医師会会长にも出席して頂いた。8日のシンポジウムでは「がん検診の現在～将来」と題して、厚労省がん・疾病対策課の渡辺真俊課長、国立がん研究センターの津金昌一郎社会と健康研究センター長、鹿児島県支部の西俣寿人副理事長らが参加して講演した。9日の全国大会では、日本対がん協会応援団長でもあるタレントの山田邦子さんが「大丈夫だよ、がんばろう！」と題して講演し、会場の約1千人を沸かせた。

### ③ 禁煙キャンペーン

協会は16年11月、国際的な禁煙プロジェクト団体「グローバルブリッジ」と共同パートナーシップを結んだ。グローバルブリッジは、禁煙治療プログラム

で定評のある米国・メイヨークリニックに本部があり、世界 30 カ国以上でプロジェクトを行っている。日本国内での禁煙活動推進や禁煙治療に関わる専門家育成のため、多額の資金を助成する予定で、協会は日本側窓口として協力する。17 年度から本格的な取り組みが始まる。

また、奥仲哲弥・山王病院副院長による禁煙教室を映像化した DVD「Dr. 奥仲の熱血出前授業」を 1 千枚作ったほか、禁煙をテーマにしたポスターを約 4 万部作成した。

#### ④ 国際対がん活動と連携した活動

協会が加盟する国際対がん連合（UICC）の「世界がん会議」が 10 月、パリで開かれ、垣添会長が出席した。また、世界がん会議が東京で 1966 年に開かれて 50 年経たことを記念して、UICC 日本委員会が 10 月、50 周年記念行事を日本癌治療学会とともに横浜市で開いた。協会はこの催しに全面的に協力した。

#### 【啓発セミナー】

##### ① 全国巡回がんセミナー

検診とがん早期発見の大切さを、全国を回りながら啓発するセミナーで、16 年度は 11 月に滋賀県野洲市、12 月に横浜市で、それぞれ地元支部と共に開いた。垣添会長の基調講演のほか、野洲会場では滋賀県産科婦人科医会の高橋健太郎会長と滋賀県がん患者団体連絡協議会の菊井津多子会長が、横浜会場では胃がん体験者でもある「ザ・ワイルドワンズ」の鳥塚しげきさんが講演した。

##### ② 乳がんセミナー

住友生命、富国生命とタイアップして年 2 回開催した。グループ支部の医師や保健師が講師になり、住友生命、富国生命の社員ら 30~100 人を対象に、乳がんの基礎知識やセルフチェックの方法などを説明した。

##### ③ 遺贈セミナー

遺贈による寄付を増やすため、垣添会長の講演と、三井住友信託銀行の財務コンサルタントによる遺贈・相続財産に関する講演をセットにした協会主催のセミナー。16 年度は前年度同様、11 月に東京で、3 月に大阪でそれぞれ開催した。三井住友信託銀行のコンサルタントには、社会貢献団体への遺贈の意義について語ってもらった。みずほ信託銀行主催の遺贈セミナーにも、16 年度から新たに参加することになった。垣添会長が鹿児島市の会場で講演した。

#### 【子宮頸がん検診の未受診者対策】

子宮頸がん検診の未受診者対策として、島根県支部の協力を得て自己採取 HPV 検査による受診率向上の活動に取り組んだ。自己採取 HPV 検査で陽性だった人に、検診に行ってもらうのが狙い。

専門家向けの啓発活動として、日本産婦人科医会と共同で精度の高い子宮頸がん検診・子宮体がん検査に関するセミナーを支部の協力を得ながら長崎、盛岡、高松、札幌での日本産科婦人科学会の地方学術集会などで開いた。

### 【広報】

協会の広報活動は紙媒体が中心になっているため、新たな取り組みとしてプロモーションムービーを作り、17年1月、協会ホームページ(HP)で公開した。協会の主要イベント、検診現場を撮影し、がん征圧にかける想いを参加者に語ってもらった。検診現場の撮影では宮城県支部の協力を得た。また、HPやフェースブックの更新頻度、ニュースリリース回数を増やし、PRに努めた。

機関紙「対がん協会報」は例年通り、毎月約1万500部発行した。啓発リーフレットと啓発ポスターは例年同様、2種類ずつ発行した。このうちリーフレットについては、「がん検診」を約17万1千部(前年度比約2万部減)、「乳がんのセルフチェック」を約58万3千部(同4万部増)作り、ポスターについては、「がん征圧」を約5万2千部(同1千部増)、「禁煙」を約4万部(同1千部増)作った。

協会報、リーフレット、ポスターとともにグループ支部をはじめ、自治体、保健所、病院などで活用してもらっている。特に「乳がんのセルフチェック」は乳がんへの関心の高まりを反映して、支部以外からの注文が増えている。禁煙ポスターについては、1千部購入する企業があったため増刷した。がん征圧ポスターは、学生対象の「がん征圧ポスターデザインコンテスト」の最優秀作品をポスター化しており、若い世代への啓発活動も兼ねている。年々取り上げるメディアが増え、応募数、質・量ともに向上してきた。協会の全体像を紹介する「協会案内パンフレット」は4千部(同1千部減)作った。

支部からの公募で制定する「がん征圧スローガン」は16年度、「大切なあなたと一緒にがん検診」を選んだ。

### 【がん検診実施状況】

グループ支部が実施しているがん検診の結果をまとめた「2016年度版がん検診年次報告」を作成した。15年度に実施したがん検診の結果と、14年度に実施したがん検診でがんが見つかった人の治療状況などを1年間フォローアップした結果からなる。15年度のがん検診受診者は延べ1174万3259人で、前年度より15万874人多く、3年連続の増加となった。がんが見つかったのは分かった

だけで1万4290人、前年度より602人（4.4%）増えた。特に増加が目立ったのは大腸がんで前年度より341人増えて4225人（増加率8.8%）、乳がんは125人増えて3114人（同4.1%）だった。

## 公2事業 専門家・専門団体向けの支援事業

### 【将来の検診に向けた支援事業】

胃がん検診・乳がん検診の厚労省指針が16年度から改定された。実際の住民検診で、新たな指針がどの程度導入されているかを調べるため、協会は16年度秋、全国の市区町村を対象にアンケートをした（回答は1010自治体、回答率58%）。内視鏡による胃がん検診については17年度、293自治体が導入する見込みと回答した。また胃がん検診の指針改定で新たに導入された内視鏡検査の理解を深めるための研修会を開いた。

### 【助成】

#### ① 「プロジェクト未来」がん研究助成

リレー・フォー・ライフに寄せられた募金をもとに、優れたがん研究に対して助成金を贈る制度。16年度の応募総数は125件で、前年度の87件と比べて大幅に増えた。大学や病院、医師、研究者らへの呼びかけに力を入れた結果だ。内訳は「基礎研究・臨床研究」82件、「患者・家族ケアに関する研究」43件だった。医師や研究者、リレー・フォー・ライフ実行委員で構成された審査委員会が審査し、20件の助成を決めた。助成金総額は1750万円だった。

なお、助成対象になった研究者にはリレー・フォー・ライフに協力することが求められる。今後、意識的に働きかけていきたい。

#### ② 若手医師の海外奨学制度

受賞者3人に奨学金を250万円ずつ贈り、米国で1年間研修してもらう「リレー・フォー・ライフマイ・オンコロジー・ドリーム奨励賞」。リレー・フォー・ライフの寄付をもとにしている。当協会の海外留学制度は論文や研究報告といった縛りが少なく比較的の自由度が高いのが特徴だ。

16年度は6人から応募があり、選考の結果、テキサス大学MDアンダーソンがんセンターには喜多久美子氏（聖路加国際病院 乳腺外科）と西本光孝氏（大阪市立大学大学院 医学研究科）、シカゴ大学医学部には宮内栄作氏（東北大学病院 呼吸器内科）を研修派遣することを決めた。17年度に奨学金を支給する。

15年度に受賞した岩瀬俊明氏（千葉大学医学部附属病院 臓器制御外科）と及川将弘氏（にゅうわ会及川病院 乳腺外科）、及び鳩貝健氏（国立がん研究センタ

一東病院）に対しては 16 年度、奨学金を支給した。

### ③ 患者会、がん啓発団体への助成

助成申し込みがあった乳がん患者・啓発団体の中から 5 団体を選び、計 50 万円を助成した。特に新規申し込み団体へ重点的に助成した。これとは別に、名古屋市で開かれた「がん就労を考える会」に 10 万円を助成した。

## 【研修】

### ① 乳房超音波技術講習会

公益財団法人結核予防会、NPO 法人日本乳がん検診精度管理中央機構（精中機構）との共催で 17 年 2 月 6・7 日に実施し、検査に従事する 48 人が参加した。講義や読影、装置を使った実技を学んだ後、受講生は最終日に認定試験を受け、34 人が好成績を収めた。

### ② 保健師・看護師研修会

17 年 2 月 23・24 日に実施した。グループ支部、自治体・関連団体等に所属する保健師・看護師や事務員ら 49 人が参加した。検診現場共通の悩みや課題について意見交換するほか、受診率を上げるための取り組みや工夫などについて多くの人と話し合う「ワールドカフェ」を実施した。

### ③ 診療放射線技師研修会

17 年 3 月 9～11 日に結核予防会と共に仙台で初開催し、62 人が参加した。講義やフィルム評価を行った上で、最終日は被災地を視察した。

### ④ マンモグラフィー撮影技術講習会

ニーズへの対応が一段落してきたので、16 年度はいったん中止した。17 年度は実施する予定だ。

### ⑤ 胃内視鏡研修会

胃がん検診の指針改定で新たに導入された内視鏡検査の理解を深めるため、17 年 2 月、主に支部向けに研修会を開いた。多くの支部から参加があった。

## 【表彰】

### ① 朝日がん大賞

2001 年度に設けられた賞で、副賞は 100 万円。16 年度は特定非営利活動法人地域がん登録全国協議会（田中英夫理事長）に贈った。同協議会（16 年 10 月

に「日本がん登録協議会」に名称変更)は、都道府県のがん登録担当者有志によって 1992 年に設立された。がん登録事業の技術支援、人材育成などに努め、2013 年 12 月に成立した「がん登録等の推進に関する法律」の原案作成や、我が国のがん登録の基盤整備や登録データの利活用の促進、有効ながん対策の推進に貢献した。

## ② 日本対がん協会賞

長年がん征圧活動に貢献した 5 人と 1 団体に贈った。個人の部は群馬県の関口医院院長の関口利和氏、岐阜県の黒木医院院長の黒木尚之氏、兵庫県健康財団保健検診センター顧問の西田道弘氏、広島県地域保健医療推進機構参与の木村昭二郎氏、熊本県総合保健センター所長の土亀直俊氏。団体の部は、埼玉県の NPO 法人埼玉乳がん臨床研究グループ。

## 公3事業 がん患者サポート事業

### 【無料がん相談事業】

#### ① がん相談ホットライン

16 年度は相談員 19 人で対応した。相談件数は 11,126 件（前年度比 1,042 件減）。2015 年度は有名人の乳がん公表で、不安を感じた人による相談で件数が一気に急増したが、16 年度は少し落ち着いた。

相談者のなかには、最初は家族の相談をしていたが、今度は自分自身ががんになり、自分の相談としてまたホットラインを利用しているという方や、家族が他界してグリーフケアとして利用している方がいた。単なる情報提供に終わらず、相談者の心に寄り添い、気持ちを支えるよう努めていることが、「またホットラインを利用しよう」という気持ちにつながったと思われる。

#### ② 医師による相談

相談回数は 196 回（面接 39 回、電話 157 回）で、826 人の相談に対応した。面接相談、電話相談ともに東京、神奈川、埼玉、千葉からが多く、首都圏以外では大阪からの電話相談が多かった。

#### ③ 乳がん電話相談

母の日に合わせた 5 月に、乳がんに特化した電話相談「乳がん電話相談ウイーク」を開設し、計 32 人の相談を受けた。

### 【患者向けセミナー】

16年度は特に、治療による外見の変化をカバーするための女性がん患者向け美容セミナーに力を入れた。

メイクとハンドケアの講習とウイッグセミナーを年4回開いたほか、8月には資生堂などの協力で、女性がん患者の変身企画「ビューティスマイルプロジェクト」を初開催した。ヘアリストらの手を借りて女性がん患者が変身していく様子を動画で撮影し、協会HPで公開した。

これとは別に資生堂の協力で、女性のがん患者全般を対象にした「並木通りセミナー」を年に数回開いた。

乳がん患者向けの治療、治験、乳房再建の最新情報セミナーも17年3月に開催し、約90人が参加した。なお公1事業のピンクリボンフェスティバルでも、治療の最新情報などのシンポジウムを主に患者向けに開いている。

#### **【がんサバイバー・クラブ準備】**

2017年6月に「がんサバイバー・クラブ」を立ち上げるため、16年度から準備に入った。サバイバー・クラブはがん患者と家族の支援が目的で、新たに立ち上げるWebサイトで、様々なサービスを展開する予定。16年度は、サイト運営のための業者決定と構築作業、サービスメニューの選定などを行った。

#### **公4事業　がん研究支援事業**

##### **【がん政策研究の成果の普及啓発、均てん化を推進する事業】**

2014年度に厚生労働省から委託を受けた「がん対策推進総合研究推進事業」。医療格差を解消するため、がん政策分野で厚生労働科学研究費補助金（科研費）を受けた研究成果を、市民や医療者に普及させる3年計画の事業だ。

最終年度となった16年度は、一般向け発表会・研修会を3件、医療者向け発表会・研修会を9件開いた。研究者向けの発表会も17年2月に東京で開き、「働くがん患者の職場復帰支援に関する研究」など29の研究課題を発表してもらい、発表内容を抄録集として発行した。

##### **【新しいがん検診のあり方について、調査、研究を支援する事業】**

16年度に設けたがん検診研究部門の主要事業で、厚生労働科学研究費補助金（がん対策推進総合研究事業）の「わが国におけるがんの予防と検診の新たなあり方に関する研究」の分担研究として取り組んだ。

宮城、福井、鹿児島各県支部の幹部や外部の専門家による委員会を設け、その指導・助言を受けながら、国内で今後大きな課題になると予想される高齢者ががん検診を考えるための基礎調査を、支部の協力を求めて実施、報告書をとりまと

めた。また、17年度の研究活動の計画書を作成し、倫理審査委員会に諮った。

また16年度途中に、日本医療研究開発機構（AMED）の研究費による「肺がん検診の効率化を目指した血液バイオマーカーの実用化研究」に加わることになった。すい臓がんは早期発見が難しいため、血液中のたんぱく質（アポA2アイソフォーム）を測定して、早期発見につながるかどうかを調べる研究だ。17年度に向けた臨床研究の準備に取り組み、研究計画書を倫理審査委員会に諮った。準備にあたっては、鹿児島県支部の積極的な支援を受けた。

#### 【乳がんリスク層別化などの研究】

17年度着手を目指して準備した。日本乳癌学会と協議を進め、いくつかの支部の協力を求める方向で調整した。国立がん研究センターの倫理審査委員会でも審議した。

以上

## 2016年度の助成審査の結果一覧

助成名称	助成内容 (応募数)	応募対象・助成数 (応募数)	助成決定先 (敬称略)	金額(計)
ほほえみ基金助成	乳がん啓発活動団体のイベント、企画助成	全国の乳がん啓発団体、患者会 5件助成 (応募16団体)	ピンクリボン in 郡山実行委員会、A SHARE、イデアフォー、ブーゲンビリア、乳がん患者の会ひんくばんさん (応募16団体)	50万円 =10万円×5件
マイ・オンコロジー・ドリーム奨励賞	米国テキサス大学MDACC、シカゴ大学医学部で研修	若手がん専門医 3人 (応募6件)	・宮内 栄作 (シカゴ大学へ) ・喜多 久美子 (MDACCへ) ・西本 光孝 ("")	750万円 =250万円×3人
プロジェクト未来研究助成	がん研究、患者家族支援	全国のがん研究者 20人(応募125件)	縣保年、大木 理恵子、大塚 基之、河田 健二、神奈木 真理、小島 研介、 関戸 好孝、中西 真、長山 聰、浜本 隆二、村松 正道、明智 龍男、 遠藤 源樹、小澤 美和、近藤 後輔、櫻木 範明、白石 憲史郎、関 由起子、 全田 貞幹、古井 辰郎	1750万円 =1人 50万～200万円

上記は「助成対象の審査に関する規程」に則り、日本対がん協会の助成審査委員会で審議され決定した助成先の一覧。  
マイ・オンコロジー・ドリーム奨励賞の支給年度は翌年度になる予定。